

＜メディアウオッチ＞ 「袴田事件」でまたも冤罪の報道責任に類被り

上出 義樹

静岡地裁は3月27日、静岡県清水市で1966年に起きた一家4人の殺害、放火事件で死刑が確定した元プロボクサー袴田巖さん(78)の再審開始を認める決定を行い、袴田さんは同日夕、逮捕から48年ぶりに釈放された。しかし、このニュースを大きく取り上げた翌28日付の全国紙などを読む限り、捜査当局や司法への厳しい批判はあっても、その権力機関と一体となって袴田さんを犯人扱いしてきた自らの構造的な報道責任の問題には、過去の冤罪報道同様に類被りしたままだ。マスメディアは、何回同じ誤ちを繰り返すのか。

警察発表鵜呑みに犯人扱いした新聞 今度は捜査当局を断罪

例えば、28日付の在京各紙は今回の再審決定をいずれも社説で扱い、読売「科学鑑定が導いた『証拠』捏造」、朝日「死刑囚の再審 過ちはすみやかに正せ」、毎日「直ちに再審を開始せよ」などと、捜査機関や裁判所を断罪している。ところが、警察情報を鵜呑みにし、事実上冤罪に加担してきた報道の責任はどの社説も全く触れていない。

わずかに、東京新聞と産経新聞がそれぞれインタビュー記事とコラムで、袴田さんの無実の可能性を最初に雑誌や著書で訴えたジャーナリスト高杉晋吾さん(81)が、新聞の警察発表記事に早い段階から疑問を持ったことや、ボクサー仲間が袴田さんの逮捕直後に新聞に載った「身を持ち崩した元ボクサー」などの表現に対しマスコミや世間の偏見を感じ、袴田さんを支援する一つのきっかけになったことなどを取り上げている程度だ。

菅家さんの無実の叫び無視した足利事件と同じ構図

参考までに、DNA鑑定が再審開始の決め手になるなど、袴田事件とも共通点がある近年の代表的な冤罪事件として、まだ人々の記憶に新しい足利事件の事をおさらいしておきたい。1990年5月に栃木県足利市内で起きた女兒殺害事件で、翌91年12月に同市内の元幼稚園バス運転手・菅家利和さん(当時45歳)が殺人容疑などで栃木県警足利署に逮捕された。逮捕の最大の根拠となったのは、証拠品のDNA鑑定だったが、そのDNA鑑定の誤りが再鑑定で明らかになり、2010年に無罪が確定した。その無罪判決が出る前に東京高検が2009年6月、獄中の菅家さんの刑の執行を停止して異例の釈放をしたことから、菅家さんは逮捕から17年半ぶりにようやく自由の身となり、新聞やテレビは菅家さんを一躍ヒーローとして大々的に取り上げた。

警察との癒着や記者クラブの弊害など悪しき構造にメス入れぬ検証記事

しかし、幼女殺害事件の発生当初、報道機関は捜査線上に浮かんでいた菅家さんの逮捕をいち早く伝えようと、新聞を中心に捜査当局の狙いのままに特ダネ合戦を展開。一審、二審の裁判を通じて無罪を主張する菅家さんの真実の訴えにも耳を傾けようとしなかった。

さらに、無実が明らかになった後も、全国紙は冤罪に加担する形になった自らの報道責任について表面的な検証記事で済ませ、冤罪報道の背景に見える権力機関との癒着関係や閉鎖的な記者クラブ制度など、日本のマス・メディアの特異な体質・構造にまでメスを入れて真正面から徹底検証する紙面はついに見られなかった。

その足利冤罪事件の被害者である菅家さんは、今回の袴田さんの再審開始決定と釈放について、「良かった。これはすごいこと。涙が出ました。DNA鑑定（による再審開始）といえば、自分と同じ。おめでとうと言いたい。人ごとじゃなくて自分のことのようにうれしかった。再審が始まってみんなで会いたいと思っている」と、一部メディアにコメントを寄せている。

抜本的な自浄作用を期待できない日本のマスコミ

袴田さんの再審決定後も、捜査当局との癒着の構造や日本的な記者クラブ制度の弊害など、横並びの冤罪報道を生む仕組みにまでメスを入れるような記事は見当たらない。今後、新聞などが冤罪報道を検証することがあったとしても、たぶん、「裏付け取材が足りなかった」「思い込みがあった」といった表面的な「原因」を挙げてお茶を濁すのが落ちだろう。身もふたもない言い方になるが、抜本的な自浄作用を日本の「マスコミ」にあまり期待しない方が良さそうだ。

空々しい朝日の「おことわり」

そんな中で、朝日の28日付朝刊1面に、今後は「袴田死刑囚」から「袴田さん」に表記を改めるとの「おことわり」が載っていた。冤罪報道への真摯な検証記事もなく、司法の「決定」に従っていきなり、袴田さんの呼び方が変わってしまうとは、何とも空々しい。

（かみで・よしき）北海道新聞社で東京支社政治経済部、シンガポール特派員、編集委員などを担当。現在フリーランス記者。上智大大学院博士後期課程（新聞学専攻）在学中。